

**チューリッヒ歌劇場《ツァイデー》《椿姫》で喝采を浴びたエヴァ・メイ**

1月31日、チューリッヒ歌劇場の《ツァイデー》公演当日。雪混じりの雨の中、チューリッヒ歌劇場の楽屋口を入った所で待っていると、エヴァ・メイが現れた。毛皮の帽子にコートにブーツと完全防寒のせいか、つやつやした頬が紅潮し、ずっと若くみえる彼女に少しドキドキした。窓口に、少々腰を屈めて話すその姿には、ひたむきささえ感じられ、印象的だった。

— このオペラを歌うきっかけは？  
 メイ(以下、M) 私にとって、モーツァルトは特別な存在で、24歳の時のデビューも《後宮よりの逃走》だったので、モーツァルトの作品は網羅しなかったからです。もうすぐ《皇帝ティトの慈悲》もチューリッヒで初日を迎えますし、来年は《膺の女園丁》も決まっています。

— 《ツァイデー》では、私が聴いた、例えば《ファルスタッフ》などとは別の声を使っているかのようでしたが？

M それは興味深い質問ですね。意識したことはありませんでしたが、考えてみれば、そうかもしれません。モーツァルトというのは、唯一、楽器のような音色を要求する作曲家で、職人技が要求されます。簡単に書か

れていますが、無駄も欠落もありません。そういう集中力が、別の声を作っているのかもしれない。

— 5月に東京でミミを歌われますが、また別の声で聴かせて下さるのですか。

M 本当にどうするんでしょう(笑)。でも、2年前、フェニーチェでの《タイース》の成功で、自分の声にどこまでの可能性があるかはわかっているの、ベストを尽くします。今まではずっとムゼッタを歌ってきて、1992年のジェノヴァでは、フレーニがミミでした。彼女は、実物もミミそのもののような、“アンティ・ディーヴァ”な人です。彼女から学んだことを、今回活かせればと思います。ミミという役柄は、本当に実物大の人物像で、弱くて、“アンティ・ディーヴァ”な単純さに惹かれます。

2月15日《椿姫》公演当日。また今年最高かと思われる雪の中、テレビ録画やDVD制作のために、大きなトラックが5台ほど並んでいた。幕が上がると黒を基調にした舞台。琥珀色のスレンダーなドレスのメイがよく映える。登場から、終末を予感させる、たおやかなヴィオレッタだった。高級娼婦という、華やかさ、奔放さ、そんな今までのヴィオレッタを期待していると、一瞬物足りなさを感じるかもしれないが、そのうち彼女の世界に引き込まれる。1幕

から涙を誘う《椿姫》なんて、そうそうお目にかかれるものではないし、幕が進むうち、「ヴィオレッタとは、こういう人なのだ。今までののは、イメージされたヴィオレッタだ」と確信させるほどの自然な演技だ。

— メイさんのヴィオレッタは特別な、という批評をよく聞きますが、その理由は何だと思えますか？

M それは、ご本人方に聞かなければ分かりませんが(笑)、デビューの翌年に《椿姫》を歌っています。初めから、とても気になる役柄でした。それは、彼女がいろいろな女の顔を持っているからです。そして、この役は若いうちに挑戦しない

といけないと思っていました。それは、声音に瑞々しさを求めるからです。最初の《椿姫》以降、毎年、長くても1年おきには《椿姫》を歌うようにしていますが、歌う度に、解釈が変わり、私のヴィオレッタも、私と一緒に成長していくのがわかります。それは、声の成熟度とも関係がありますが、それほど、思い入れがあり、一番近く感じられる役の1つなので、特別なヴィオレッタを作り上げているのかもしれない。

— 日本の聴衆に対する印象はいかがですか。

M 私はヨーロッパの外へ行くのがあまり好きではありません。文化に対する感

覚が違うからです。でも、日本には喜んで行きます。日本人は文化に対する敬意があり、準備も周到です。日本食もイタリア料理の次に好きです。今回も、前回の《愛の妙薬》に続いて、またサントリーホールで歌えるのを楽しみにしています。

彼女自身が2、3度使った「アンティ・ディーヴァ」という言葉の通り、今までのディーヴァとはまったく反対の、新しいディーヴァの可能性を見た。これからが楽しみだ。

(中 東生)



“椿姫”第2幕。ジェルモン訪問で、アルフレードとの別れを決意するヴィオレッタ ©Suzanne Schwierz



チューリッヒ歌劇場にて